

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 32

February, 2013

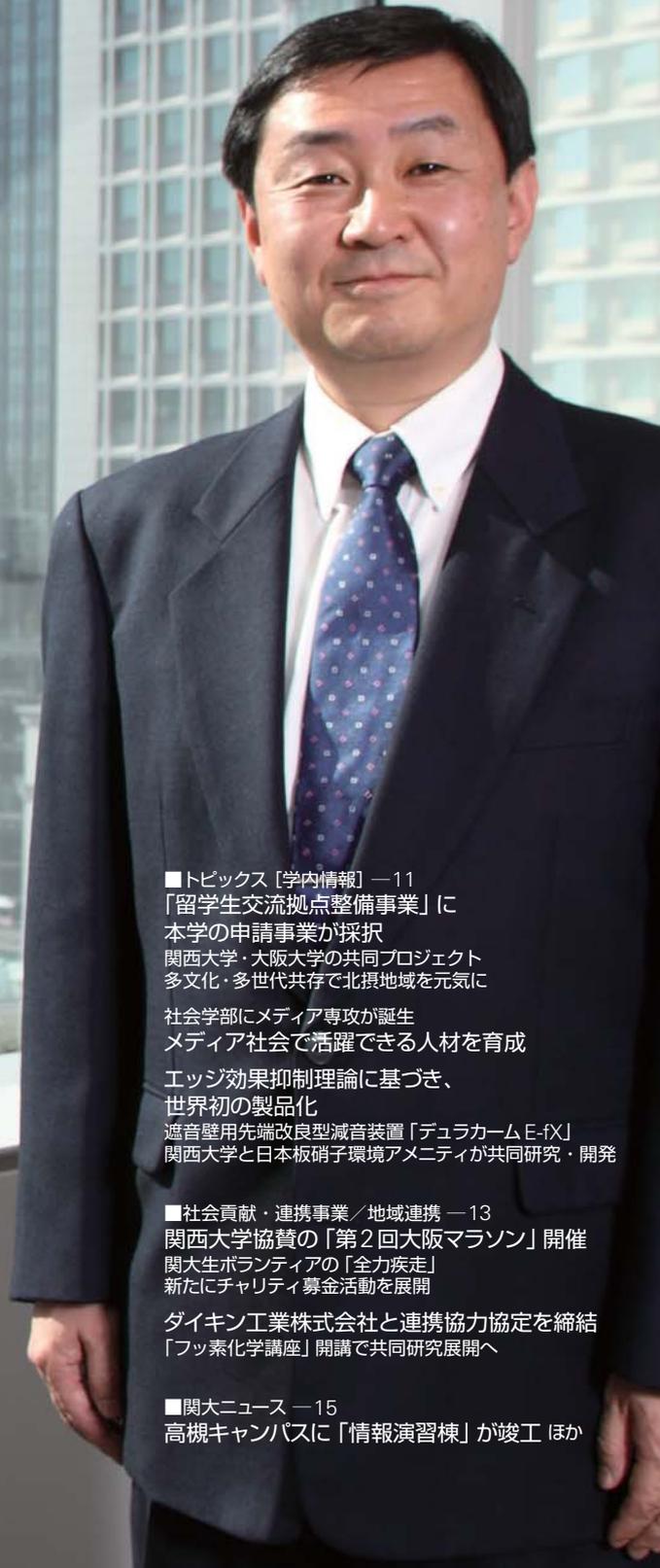
関西大学ニュースレター
発行日：2013年(平成25年)2月28日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



就職活動で学び、「知る」

日本の新卒一括採用システムは江戸時代からあった

■対談 岡崎仁美 株式会社リクルートキャリア 新卒事業本部リクナビ編集長
浜野潔 関西大学キャリアセンター所長 / 経済学部教授



- トピックス [学内情報] — 11
「留学生交流拠点整備事業」に
本学の申請事業が採択
関西大学・大阪大学の共同プロジェクト
多文化・多世代共存で北摂地域を元気に
社会学部にメディア専攻が誕生
メディア社会で活躍できる人材を育成
エッジ効果抑制理論に基づき、
世界初の製品化
遮音壁用先端改良型減音装置「デュラカム E-fX」
関西大学と日本板硝子環境アメニティが共同研究・開発
- 社会貢献・連携事業 / 地域連携 — 13
関西大学協賛の「第2回大阪マラソン」開催
関大生ボランティアの「全力疾走」
新たにチャリティ募金活動を展開
ダイキン工業株式会社と連携協力協定を締結
「フッ素化学講座」開講で共同研究展開へ
- 関大ニュース — 15
高槻キャンパスに「情報演習棟」が竣工 ほか

- リーダーズ・ナウ — 5
在学生 — 政策創造学部3年次生
西田 光 さん
卒業生 — 株式会社NTTコム 関西支社
営業部 営業戦略担当
南古 尚人 さん
- 研究最前線
メディアプラットフォームと音楽産業論の研究
豊かな音楽生態系をつくる
音楽メディアの未来を提言 — 7
社会学部 — 三浦 文夫 教授
D-アミノ酸の定量的解析と生成機構の研究
自然の力を生かす酒造りに研究を応用 — 9
化学生命工学部 生命・生物工学科 — 老川 典夫 教授

■対談



就職活動で学び、知る

日本の新卒一括採用システムは江戸時代からあった

岡崎 仁美 ・株式会社リクルートキャリア 新卒事業本部 リクナビ編集長

浜野 潔 ・関西大学キャリアセンター所長／経済学部教授

就職活動は厳しさを増しているが、日本の新卒一括採用は平等な社会システムであり、幅広い学びのチャンスでもある。就職情報サイト「リクナビ」の岡崎仁美編集長は、「知る」ことによって道は開けると語る。歴史人口学が専門の浜野潔・関西大学キャリアセンター所長が、日本の就職の歴史を踏まえ、就職活動の極意を聞く。

◆仕事をしながら学んで自分を鍛える

浜野 関西大学では現在、来春卒業予定の学生が就職活動に励んでいます。今日は、新卒就職を目指す多くの学生が利用している就職情報サイト「リクナビ」の岡崎仁美編集長を、関西大学東京センターにお招きしました。まず、ご自身がリクルートに入社された経緯をお聞かせください。

岡崎 私がリクルートに入社した1993年は、バブル崩壊の後で、就職氷河期という言葉が広がりつつある時期でした。ことに女子学生には厳しい状況で、会社訪問の申し込みの電話をし

たら「女子は採りません」とあからさまに告げられたことがありました。社会に出たら今までの学生時代のような価値観ではやっていけないのだ、と厳しい洗礼を受けました。

農学部で学んだ私には、大学院に進むか、化学系の職種に就くか、全く違う職種に就くか、という三つの路がありました。私の場合は職種ではなく社風が最終的な決め手になりました。いわゆるOB・OG訪問をした際、リクルートには多彩なキャラクターの人がいて、それぞれ色は違うのに色が濃い、という印象を受けました。リクルートの先輩社員たちは、自分の看板で仕事をしているように感じたのです。もちろん会社の看板を借りながらですが、自分の看板を強くしようという気持ちの人が集まっている会社だと思いました。

入ると営業職に就くことは分かっており、営業職には全く自信がなかったので、苦勞するだろうなと思いました。でも、ちゃんと仕事をさせてくれる会社で、仕事をしながら自分を鍛えられるようなところがいい。今のうちに苦勞しておかないと先々心配だという思いもあり、最終的にリクルートに決めました。**浜野** 当時は、あの大きな電話帳のようなリクルートブックの時代ですか。

岡崎 ええ。先輩に話を聞いたときに、リクルートの広告はイメージを訴えればいいのではなく、実際の反響が厳しく問われる広告だと言われました。どれだけ反響があったかで評価されるから、それがつらいと思う人には向かないよと。私は、はっきり成績が出て、悪かったら問題を解決するためにアクションを起こせるほうが、いろんなことを学べるのではないかと思いました。組織全体でそういうふうに進んでいる会社は、生き物として面白いと感じたのです。

私は生物が大好きで、大学時代も生態系の研究をしていました。生態系って、現実にはさまざまな事象の中でシステムが組み変わっていきたり、突然変異があったりして、とても面白い。現実には起きていることをベースにいろいろ試行錯誤できるのは、自分の価値観に合っていると思いました。

◆リクルートブックからリクナビへ

浜野 岡崎さんが入社後、最初にされたのはどういうお仕事ですか。

岡崎 まさにリクルートブックの営業職です。企業にとっては掲載することが目的ではなく、採用することが目的ですから、面接や説明会などのやり方についても、ご相談を受けることが多かったですね。ちょうど時代的に面白いタイミングで仕事をさせていただいたと思います。新卒のマーケットは、1997年が転換点になっています。就職協定が廃止されて倫理憲章が変わるとともに、新卒者に占める大卒者の割合が高卒者の割合を上回った年です。

私は大阪の中小企業さんを担当し、「リクルートブックに掲載ませんか」ではなく、「新卒採用にチャレンジしませんか」と、新規開拓に回りました。「うちは大卒なんか採らない」と言っていた企業が、徐々に変わっていった時期でした。

浜野 リクルートブックに代表されるような就職情報誌を利用し、採用活動を展開する企業のすそ野がどんどん広がっていったところですね。

岡崎 その起点となったのが1997年ぐらいだったと認識しています。

浜野 その一方で、1995年にウィンドウズ95が出て、日本でもインターネットが普及するようになり、いつの間にかリクルートブックがウェブを利用したものになっていきました。

岡崎 リクナビが初めて世に出たのは1996年です。中途採用のエンジニアや理系学生には、インターネットで応募できたほうが利便性が高いという知見も得られていました。

浜野 なるほど。教員の私には、就職でパソコンが必要になると言われ出してから、パソコンを習得しようとして熱心に取り組む学生が増えたという印象があるのです。それが1990年代末ぐらいだったと思います。そういう意味では、リクナビはコンピュータ教育の面でも大きな役割を果たしたと言えます。

岡崎 そうですね。学生の皆さんは、はがきを書くのが大変だったので、就職活動がやりやすくなったと思います。企業の側では、採用活動のコスト削減のためにネットにシフトした面もあります。採用したい企業にとってリーズナブルにチャンスをつ

かめることが、ネット化を後押ししてくれました。思ってもみない応募者に会えるようになったという声も、随分聞きました。

双方の機会が拡大したのですが、就職の領域は難しく、便利なのが本当にいいのかといった議論もよく交わされます。自分の足で企業を開拓するべきだと。確かに実際に自分で確かめる行為は必ず必要です。しかしとっかかりの情報は、より多くの人にスピーディに提供されてしかるべきです。その両方がかなえられるような就職システムづくりに貢献したいと思っています。

◆江戸時代の商人の世界は13歳で一括採用

浜野 私は歴史の研究者ですので、ここで少し就職に関する歴史的なことも考えてみたいのです。

日本の雇用システムには、二つの特徴があります。その一つは、1920年代に形成されたといわれる終身雇用、年功序列です。企業がトレーニングして身につけさせた技術を持った人に転職されては困るので、一つの会社で長く勤めてもらうシステムができました。

もう一つは、新卒一括採用です。私は、江戸時代あたりにそのルーツがあるのではないかと考えています。簡単に言うと、丁稚奉公の世界です。例えば、大阪や京都の本店といわれる商家では、数年13歳あたりの者を採用することが決まっています。出替わり日を決めて、一斉に採用するのです。調べてみると、本店以外の小さな店でもそうでした。13、14歳で入り、18歳で手代に昇進し、手代になれない者はたいてい辞めていきます。これは新卒一括採用の発想だと思います。

なぜ一括採用のシステムが日本で生まれたかということになると、13歳から18歳までの5年間はトレーニング期間になっていたのです。いわば企業内訓練であり、それがシステムティックに動いていた。もし18歳で辞めて他の仕事に就いても、あるいは自分で独立するか、家を継ぐ場合なども含めて、身につけたものが将来生きるようなかたちの訓練が行われていたのです。

ところで、新卒一括採用が前提になっているリクナビのようなシステムは、外国ではあまりないのでしょうか？

岡崎 ええ。海外の大学の方々に日本の新卒採用のお話をさせていただく機会があるのですが、そのときによく「誰でもチャレンジできる日本は素晴らしいですね」と言われます。身分制度の制限やコネクションの有無でそもそも応募すら自由にでき



学生を交え就職活動について話す、岡崎仁美さん(中央)と浜野潔キャリアセンター所長(右)



浜野 深 (はまの きよし)
1958年東京都生まれ。89年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。博士(経済学)。2002年関西大学に着任。経済学部副学部長などを経て2012年10月よりキャリアセンター所長に就任。著書に『歴史人口学で読む江戸日本』『近世京都の歴史人口学的研究』など。

ないのが常識、という国の方からすれば驚きのシステムだそうです。

浜野 まさに一括採用だった商人の世界はほとんど平等で、商家で生まれた者でなくても、例えば農民が商人になることもできたのです。江戸時代は武家社会ですから、武士が支配者でしたが、必ずしも富や財までは独占していません。それなりにキャリアパスが用意されていた。ただ、武士の世界はそのパスがうまく機能せず、生まれた家柄によってどこまで出世できるかが決まっていた。

岡崎 本来、人材育成のシステムとしての新卒一括採用なんだろうと思います。それぞれの持ち味を生かしながら一人一人育てるような価値観があるところも、大きなポイントです。しかし、今はシステム疲労が起きていて、会社には余裕がなく育てられないから自ら育つタイプの人を厳選したいと、採用にやや傾倒しているような状況になってきています。

浜野 もっとも江戸時代の商家でも、先輩を見ながら自分で学んでいくような潜在力がある人材を採ったと思うのです。そこで身につけたものは、他へ行っても役立つ。それは制度であると同時に、新入社員の方の気持ちの持ち方も大きいと思います。

私はよく学生に、新卒一括採用では少なくとも5年ぐらいの間は仕事と勉強の両方だと言っています。勉強させてもらって、

少なくとも5年ぐらいの間は仕事と勉強の両方だと言っています。勉強させてもらって、そこで身につくものがキャリア形成として役立つような道がよいのではないかと力説しています。

そこで身につくものがキャリア形成として役立つような道がよいのではないかと力説しています。

◆インターンシップを中心とするキャリア支援

浜野 関西大学では2006年度に文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」の採択を受けた独自のキャリア教育プログラム「総合大学における標準型キャリア教育の展開～学生一人ひとりの勤労観・職業観を育む関西大学キャリア教育プログラム(K-CEP: Kansai University Career Education Program)」を基本概念にさまざまな学生支援を展開しています。

このプログラムは、「大学の前に」、「大学とともに」、「大学の後に(卒業後5年程度までの方に対する手厚い就業支援)」という三つのステージからなります。特に真ん中の「大学とともに」が、本学在学生のキャリア支援を指し「キャリア支援V段階システム」によって形作られています。関西大学キャリアセンターは、入学時から卒業するまでの4年間を5段階に分けて、学生が将来に向けた自分自身のキャリアデザインを描く支援をする役割を担っています。

具体的には、まず入学直後に、ステップI「キャリア意識の啓発」から始まります。入学生全員に「キャリアデザインブック」を配付し、学部の導入ゼミなどを通じて将来について考える機会を提供します。ステップIIでは、正課の授業科目として「キャリアデザイン科目」を全学共通で履修できるようにしています。あわせてキャリアセンターでは「しごとと研究セミナー」や「社会人になるためのスキルアップセミナー」をはじめ多彩な課外講座を開催しています。

このキャリア教育システムのコアとなるプログラムが、ステップIII「インターンシップ事前研修・実習」です。本学ではいち早く1997年度からインターンシップを全学的に導入し、主に3年次の夏休みを利用して実施しています。実習先は一般企業から官公庁、小中高の学校現場まで幅広く、多数の学生が参加しています。海外の企業で就業体験ができる国際インターンシップや、3～6カ月間の長期インターンシップも用意しています。そして、ステップIV「インターンシップ事後研修」では、自らの体験を振り返ってその後の進路選択に繋げることができるようにしています。



最後のステップV「就職活動への誘い」では、3年次から始まる本格的な就職活動を実践的なプログラムで支援します。なかでも学内企業研究会は、毎年1,000社を超える企業にご協力をいただいて、学生が人事担当者と直接面談できる絶好の機会を提供しています。

ところで、この「K-CEP」を基軸にして就職活動支援をさらに充実させたプログラム「景気に左右されない職業選択力を育む関西大学キャリアサポート」が、2010年度文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業(学生支援推進プログラム)」に再び採択を受け、その3年間の成果が先日「S評価」を頂戴するとともに優秀校に選定されました。

岡崎 各大学の方々が尽力された結果、この10～15年ぐらいで大学のキャリア支援は様変わりし、大きな進歩を遂げたと思います。大学がキャリア教育の仕上げの部分を担当されているので、いろいろ悩み深いところがあるかと思います。ただ、その手前のところで取り組まないで解決しないような問題もあるのではないのでしょうか。関西大学には高校や小中学校の教育機関もありますので、一貫したキャリア形成の取り組みも可能かと思いますが、いかがですか。

浜野 先ほどお話しした「K-CEP」の「大学の前に」がまさしくその部分にあたり、本学併設校に限らず広く一般の小中高校教員を対象とするキャリア教育研修を実施しています。キャリア教育の意義や子どもたちと向き合う様々な技法についての研修を2005年度から毎年夏休みの2日間、40～50人の先生方に本学千里山キャンパスに来ていただいて、地道な取り組みを続けています。

なお、小中高校に本学教員が直接出向いて講義を行う教育連携事業は随分前から大学全体で取り組んでいます。大学が持つ幅広い英知が子どもたちの知的好奇心を刺激して、彼らや彼女たちが将来の夢を大きく抱くようになることも大学の大事な役割であると考えています。

◆まず「知る」!
自分の気持ちが動いたところで頑張れ

浜野 就職活動に励んでも、全員が心に決めた第一志望に入れるわけではないのが実情です。しかし、歴史を見てみると、その時代には必ずしも大きくなかったビジネスが10年20年と続くうちに大きなビジネスになる、あるいは逆もある。非常に大きかった産業がどんどん衰退してしまう。やはり、これから伸びるところへ良い人材が行かなければいけない。だから、希望がかなわなかったことも、また一つのチャンスだと、学生に理解してもらうことも大事だと思っています。

岡崎 外から見て、非常に分かりにくい仕事が多くなってきていますね。時代の変化も激しいので、子どものころにはなかった職業を選択する人が大半です。また、これからは自分が就職したところになかったような業界に転職するということも起きるでしょう。ですから、あらゆる機会を通じて、まず「知る」ということを心がけていただきたいと思います。

入りたい会社を決めてしまっていて、それ以外は考えられないという人、やりたいことがないのに就職活動をしなければなら

積極的に行動して知り、それによって自分の気持ち動いたところが頑張れるところであるという考え方で取り組んでいただきたいですね。



岡崎 仁美 (おかざき ひとみ)
1971年香川県生まれ。93年京都大学農学部卒業、株式会社リクルート入社。関西人材総合営業部で営業職に7年従事した後、転職情報誌「ピーニング」関東版編集企画マネージャー、同誌副編集長、転職サイト「リクナビNEXT」編集長を経て、2007年より「リクナビ」編集長。現在、株式会社リクルートキャリア新卒事業本部 リクナビ編集長。

人も多い。でも、知らないことをやりたいとは思えないでしょう。まずはぜひ、知りに行ってみてください。キャンパスの中でも外でもいろんなチャンスがあると思いますから、積極的に行動して知り、それによって自分の気持ちが動いたところが頑張れるところであるという考え方で取り組んでいただきたいですね。

浜野 最後にもう一言、学生たちにアドバイスをお願いします。岡崎 ごく当たり前のことですが、就職で内定をもらうことがゴールではなく、実際に就いた仕事を頑張ることで、自分の職業人生活を充実させることが重要です。どういう仕事で頑張れそうかという、やっぱり好きであるとか、思い入れがあるとか、自分が共感できるものがある、自分の持ち味が活かせる仕事でしょう。

就職も結婚と同じで、それがゴールではありません。結婚後にこんな生活をしたい、という希望を持ち、それを実現するために夫婦で力を合わせていくことが重要ですね。就職活動も、ぜひ将来を楽しみに、いろいろ想像しながら臨んでいただけたらと思います。

浜野 学生は未来の主役として、将来の展望を持つことが大事だと思います。就職活動というのは重要な学びの機会であり、得るものがたくさんあることを教えていただきました。本日はどうもありがとうございました。

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

“創造”する楽しさを、仲間とともに

ひらパーで結婚式「ひら婚♪」をプロデュース

●政策創造学部3年次生
西田 光 さん

政策創造学部の深井麗雄教授ゼミは京阪電気鉄道、大阪・枚方市と連携し、枚方市が推進する「花と音楽にあふれたまち・ひらかた」の魅力を発信する取り組みの一環として、遊園地「ひらかたパーク」での結婚式「ひら婚♪」を2010年から実施している。同ゼミの西田光さんは、2012年5月に行われた第4回ひら婚♪にて、枚方ウェディング実行委員会の委員長として活躍した。

2012年5月、快晴の日曜日、枚方市の遊園地「ひらかたパーク」。600種4000株のバラが咲き誇るローズガーデンで1組のカップルが心温まる結婚式を挙げた。

枚方市内にある関西外国語大学の吹奏楽部が生演奏で盛り上げ、ウェディングケーキは市内の名店「和菓子処 大黒屋」による新郎新婦の特製似顔絵入り。枚方観光大使のゆるキャラ・くらわんこも駆け付け、最後は親戚や友人、学生スタッフだけでなくパーク来園者まで一緒になって、バラのシャワーで2人の門出を祝福した。式を終えた2人は、「学生の皆さんが親身になって関わってくれて、うれしかった。百点満点」と実行委員長の西田さんに感謝の気持ちを伝えた。枚方市にちなむ演出を

ふんだんに盛り込み、どうすれば心に残る式にできるだろうかと心を砕いてきた西田さんらの苦労が報われた瞬間だった。

1年次、大阪府議会議員の下でインターンシップを体験。未熟で何もできない自分に焦りを感じた。2年次、「厳しいけれど、きっと成長できる」と深井ゼミを希望。その夏にひら婚♪班のリーダーに指名された。仲間は3人。その仲間との共同作業が彼女に大きな成長をもたらした。

西田 光 — にしだ ひかり
■1991(平成3)年、大阪生まれ。城星学園高校卒。政策創造学部3年次生。第4回ひら婚♪の学生代表として枚方ウェディング実行委員会委員長を務める。科目提案学生委員、入試広報スタッフなども経験。高校では吹奏楽部で部長。クラリネットを担当していた。



「これまでは個人で頑張れば、結果は出ると思ってやってきたところが自分にはあった。でも、1人でできることなんてすごく少なく、仲間と一緒に頑張ることが本当に面白いということに気がきました。それが一番大きかった」

パートナーは学生だけではない。西田さんが委員長を務める実行委員会には、ひらパーを運営する京阪電鉄や枚方市の職員の方々も参加する。経験不足から壁にぶつかることもあった。それでも、年齢も職業も異なる幅広い人々との出会いがひら婚♪に携わって感じた最大の楽しさだった。「いろいろな人と関わり合いながら、1つのことを作り上げていくって、すごく楽しい。社会人の方と、仕事としてやり取りしたことは自信になっています」ただ今、就活中。メディア関係の仕事に興味を持っている。「相手の立場になって考え、情報を受け取る心が大事だと考えるようになりました。社会的に弱い立場の人からの発信を受け止めて伝える手伝いができればと思います。とにかく、ばりばり働きたい。そして、ずっと笑顔で生きたい」と、将来への希望を明るく語る。

ひら婚♪は過去2回天気に恵まれず、西田さんが委員長となった4回目で初めて晴天の屋外の下で行うことができた。「私、晴れ女なんです」と話す西田さんの笑顔に誘われるように、今回の取材中も崩れそうだった天気に晴れ間が戻った。

顧客志向のアナリスト

お客様が求めるサービスを探り、現場の販売力を高める

●株式会社 NTTドコモ 関西支社 営業部 営業戦略担当
南古 尚人 さん—法学研究科 2008年修了—

スマートフォンやタブレットが普及し、LTEを中心とした高速ブロードバンドモバイル通信の導入が加速するなど、めまぐるしく変化する携帯電話・モバイル業界。関西大学法学研究科を修了し、NTTドコモ関西支社で働く南古尚人さんは、関西全体の売上実績を日々分析し、お客様のニーズに応える販売方針を策定する営業戦略担当として活躍中だ。



Xperia Tablet Z SO-03E



docomo NEXT series
Xperia Z SO-02E

Customer
Orientation

大阪・梅田にあるNTTドコモ関西支社で、営業戦略担当の南古さんは、近畿2府4県で323店舗あるドコモショップなど各販売店の売上実績データを管理し、毎日数字を詳細に分析する。「例えば、ある特定の販売店だけが売上げを伸ばしているなど、売上傾向のパターンに当てはまらないデータを見つけることがあります。売上げが高い理由が、販売店独自のセールスプロモーションによるものと分かれば、そのセールスプロモーションを関西全域に展開できるレベルに整理し、販売方針として打ち立てます」と担当業務を説明する。



関西で900万人以上の契約者を抱えているため、セールスのちょっとした工夫であっても、販売方針として全店舗で共有する効果は大きい。南古さんは、販売戦略のヒントとなる小さい芽を見逃さず、スピードを持って大きく育てる。飽和する携帯電話市場を背景に、南古さんの発案で2台目購入に照準を合わせた販売方針を策定し、タブレットの販売数を伸ばすことに大きく貢献したこともあった。今まで感覚でやっていたものを、



南古 尚人 — なんこ ひさと
■1983(昭和58)年、和歌山県生まれ。幼少時に関東に居住。小学5年から大阪府在住。中学2・3年に長野県王滝村で山村留学する。2006年関西大学法学部卒業。2008年同大学法学研究科博士課程前期課程修了。株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ関西(同年7月より株式会社NTTドコモ)入社。滋賀支店などの勤務を経て、2010年より現職。

数字で裏付けると説得力が全く違う。そんな数字の力を活用する業務にやりがいを感じている。

自身の性格を「視野が狭い」と分析する南古さん。だからこそ、違う視点の意見にも耳を傾け、議論し合う。ビジネスシーンでも物怖じせず議論できるコミュニケーション力は、大学院で培った。

法学研究科への進学を決めたのは、法学部4年次、就職活動の最中だった。ある面接で憲法について尋ねられ、不十分な回答しかできなかったことを悔やみ「社会に出たら法律を勉強する機会はない。あと2年かけて学ぼう」と決心。順調だった就職活動を捨てて進学した。法学研究科では吉田栄司教授に憲法を学んだ。

「大学院はゼミが少人数のため、教員との距離が近く、社会人学生も多く在籍しています。年上の方たちと、自由や権利・義務とは何かを議論する中で、自分なりの考え方を見いだすことができました。また、異なる考え方も否定から入らず、フラットな感覚で受け止めるようになったと感じています。大学院での経験が、就職活動や今の職場でも生かされています」

中学から始め、大学では体育会で熱中したバスケットボールを、現在も社内にサークルを作って続けている。オンとオフを鮮明に区切って、充実した日々を過ごす南古さん。「お客様が本当に必要とする料金割引サービスの施策を考え、全国に広めたい。自分がやりたい、ではなく、お客様にとってはどうなのか。それを意識することをいつも大事にしています」と仕事上の抱負を語る。南古さんは、ぶれない顧客志向で業務に取り組む。

■研究最前線

メディアプラットフォームと音楽産業論の研究

豊かな音楽生態系をつくる
音楽メディアの未来を提言

ラジオの再編と音楽のアーカイブ構築

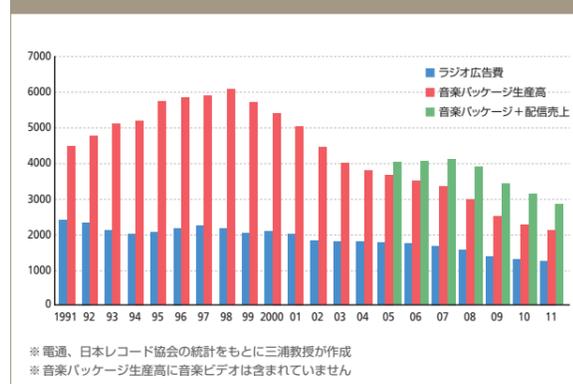
◎社会学部
三浦 文夫 教授

地上波のラジオ放送をインターネットを通じてパソコンやスマホで聴くことができる「radiko」が、2010年の配信開始以来、新たな聴取者を獲得しラジオ放送の人気回復に一役買っている。大手広告代理店・電通でマスメディアとインターネットの融合サービスの事業化などに携わり、2012年から本学で教鞭をとる三浦文夫教授こそ、radikoの考案者。メディア業界での実践経験を生かしながら、三浦教授はメディアとポピュラー音楽の関係の研究、ラジオの再価値化、日本の音楽生態系を豊かにするための提言を行っている。

■ネットでラジオを radiko を考案

——生みの親である先生から見て、radikoは順調ですか？
 実用試験に先立ち、2008年に技術実験を開始したときには、大阪府限定でわずか1000人足らずのモニターを対象に、在阪民放ラジオ6局を配信するだけでした。それが2012年には月間の利用者数(ユニークユーザー)が、1000万人を突破。民放ラジオ65局と放送大学が参加し、全国各地へ配信を行えるようになりました。ラジオを知らなかった、興味がなかった人がスマホでradikoを聴いて、初めてラジオの面白さを発見するなど、確実に若い世代にも浸透しつつあります。
 ——そもそもradikoを、なぜ考案されたのですか？
 もともと音楽とラジオの関係に興味がありました。ラジオ放

(図1)ラジオ広告費と音楽パッケージ生産高の推移



▲ radiko のホームページ <http://radiko.jp/>

送が登場した1920年代から、音楽とラジオの関係は補完し合い、1つの音楽生態系を形成していました。ポピュラー音楽の興隆は、ラジオというメディア抜きには考えられないでしょう。ところが、90年代末からラジオ広告費とCDなどの音楽パッケージ生産高が足並みを揃えるように減少し、2011年にはどちらもピーク時の半分になってしまいました。(図1)
 そこで、面白い音楽を生み、音楽を豊かなものにするには、ラジオという音声メディアの復活が必要ではないかと考えるようになりました。ただ、ラジオ受信機自体が身近にないという人も多くなり、都心部では電波状況も悪くなっていて、放送がリスナーに届いていない。ならば、ネットで放送を流せばパソコンが受信機になって、聴いてもらえるのではないか、というシンプルな発想からradikoを考案しました。

■ユーザー視点でラジオの未来を設計

——これからのラジオやradikoはどう変わっていくのでしょうか？
 ラジオはインターネットと非常に親和性が高い。この2つを組み合わせることで、ネットでラジオを聴けるだけでなく、そこからすぐにソーシャルメディアにアクセスできる、かかっている曲や歌詞が表示され、アーティストのファンサイトへ行ったり、音楽配信サイトで楽曲を購入することができます。radikoでは近くこうした機能が強化される予定です。中高年リスナーが中心だったラジオが、急にいろいろなことができる新しいメディアに変わってきたわけです。しかし、radikoはまだ初期段階。社会インフラ化するためにはさらに改革が必要です。ラジオのデジタル化をどうするかという課題もあります。し



▲(三浦教授の著書)
 『少女時代と日本の音楽生態系』(2012年、日本経済新聞出版社)
 『インターネットの世界への扉』(1995年、マガジンハウス)
 『デジタルコンテンツ革命』(1996年、日本経済新聞社)

かし、ユーザーにとってラジオは音が流れてきて、それを楽しむものであって、アナログかデジタルかなど二の次でしかありません。制度や枠組みを先に決めるのではなく、ラジオというメディアをあくまでユーザーの立場からどう捉え直したらいいかを考えるべきです。そこで現在、ユーザー視点でFM、AM、radikoを含めた、今後のラジオを再編し再価値化する研究を進めています。

私はものごとを「クリエイティブ」「ポリシー」「マーケティング」「テクノロジー」の4つの切り口から考えるようにしています。例えば、ラジオの場合ならば「クリエイティブ」は音楽、スポーツ、パーソナリティなどの番組そのもの、「ポリシー」なら放送法、電気通信事業法や、著作権等権利処理の問題というようにそれぞれの切り口で検討すべき要素が見えてきます。この4つの切り口から、メディアとコンテンツを分析研究し、次世代の音声メディアの役割、ユーザー視点の制度、技術、ビジネスモデルを考え、提言という形にまとめたいと思っています。(図2)

(図2) メディアとコンテンツを分析する4つの視点



■ポピュラー音楽のアーカイブ設立を

——メディアの現場から学問の世界に転じられて、どんな印象を受けられましたか？
 1920年代のラジオの創世記とインターネットという新しいメディアが普及し始めた近年の状況が似ていて、これからのメディアの在り方を考える上で、90年前を知ることが非常に参考にな

ります。当時のメディア生成の過程や社会構造の変化に関する研究をされている本学の先生方から、教えられることがたくさんあります。

ただ、実際にメディアの構築に携わってきた私としては、そうした社会的なアプローチを学びつつも、実践と関わることに軸足を置いたスタイルで研究を進めたいと思っています。あとは、学生に接することで、若い世代の現状を身近に感じることができるのも大学に来て良かったことですね。

——若者に関して、何か発見がありましたか？

今の学生たちはテレビを持っていない。新聞は取らない。ラジオも聴かない。情報源はほとんどネットと口コミだけの狭い世界を生きている。音楽についても、日本のポピュラー音楽は非常に多様性があるのに、そのことに気付かずごく限られた音楽だけを聴いている。音楽などの文化を楽しむリテラシーは中学、高校の頃に育まれるもの。中高生ぐらいの世代に、「こんな面白い世界があるんだ」と知らせていく種まきをメディアや音楽業界があまりやってこなかったということも一因かもしれません。種まきをいかにするかということも提言していきたいと思っています。さらに、日本のポピュラー音楽のアーカイブをつくりたいんですよ。

——音楽のアーカイブとは？

1960年代の半ばぐらいに日本独自のポピュラー音楽が生まれます。その後、グループサウンズ等を経て、本格的なロックやフォークなど、オリジナリティのあるものが出てきます。その系譜を、音源、映像、インタビュー、資料などが散逸する前に集めて、系統立ててアーカイブ化したい。若い世代が利用すれば、こんな格好いい音楽があったのか、と発見があると思います。

■産業と文化を両輪にした音楽メディア研究

——2013年度から社会学部でメディア専攻がスタートします。そこで、先生はどんな役割を担われるのでしょうか？
 メディア専攻には音楽文化、音楽メディアの社会的な研究の第一人者といえる研究者もおられます。一方、音楽とメディアの産業界で実際に仕事をしてきた私のような者もいる。産業(実務・実技)と文化(社会学)の両面の視点からアプローチする音楽メディア研究プログラム(メディア企画演習音楽)をメディア専攻の中につくり、ジャーナリスト養成と広告に並ぶ、専攻の特徴にしていきたいと考えています。産業と文化どちらから見ても、この分野で日本の最高水準の教育・研究の場にして、グローバルな発信力を持ちたいと思います。

また、私は映像実習も指導する予定です。以前から本専攻には映像・音声を収録するスタジオがあるのですが、来年度までに機材がすべて最新鋭のものに替わります。それを使って、ミュージックビデオを製作し、ネットなどを利用して、いかにプロモートするかを実際に学んでもらうつもりです。

——日本の音楽を元気にする人材が出てきそうですね。

学生には次世代のメディア産業、音楽産業を自分の手でつくり、グローバルに展開するぐらいの気概を持ってほしいと思っています。

Internet Protocol Simulcast radio

■研究最前線

D-アミノ酸の定量的解析と生成機構の研究

自然の力を生かす
酒造りに研究を応用

D-アミノ酸を強化した機能性食品を分析・開発

◎化学生命工学部 生命・生物工学科

老川 典夫 教授

アミノ酸には物理的、化学的な性質が等しいL型とD型がある。生体を構成するアミノ酸はほとんどがL型で、D型は自然にはごくわずかしかなる役に立たない成分だと長く見なされていた。ところが、近年の分析技術の進展に伴い、微生物、植物や私たちの身体にもD-アミノ酸が存在し、L型とは異なるさまざまな生理機能を果たしていることが明らかになってきた。

老川典夫教授は、D-アミノ酸研究のトップランナーとして、特に発酵食品におけるD-アミノ酸の定量的解析と生成機構の研究で世界をリード。企業と連携して、D-アミノ酸を含む食品の分析・開発にも積極的に取り組んでいる。



■産学連携による日本酒が人気

先生の研究成果を反映したお酒が販売されたそうですね。

神戸・灘の老舗、菊正宗酒造から「乳酸菌のお酒 にごりん」というリキュールが飲食店限定で販売されました。2013年春からは炭酸で割って飲みやすくした「あまシュワにごりん」が、コンビニやスーパーで販売されています。

にごりんにはうまみを強化するD-アスパラギン酸、D-アラニン、D-グルタミン酸などのD-アミノ酸が豊富に含まれていることが、生物系特定産業技術研究支援センターのイノベーション創出基礎的研究推進事業の一環として、私たちと菊正宗酒造の共同研究で明らかになっています。なかでも美肌効果が期待されるD-アスパラギン酸は、マッコリ市販酒5社平均の約44倍も含まれています。肌に良いお酒ということもあって、女性を中心によく飲まれているようです。にごりんは実はD-アミノ酸入りであることを表記した初めての発酵食品です。これがきっかけで多くの人にD-アミノ酸を知っていただければと期待しています。



◀老川教授と菊正宗酒造との共同研究によってD-アミノ酸入り商品として上市された「乳酸菌のお酒 にごりん」と「あまシュワにごりん」。生酛で育った天然の乳酸菌によって作られたD-アミノ酸がグラス1杯に5mg含まれている

—どんなお酒にD-アミノ酸が多く含まれているのですか？

D-アミノ酸が食品に含まれていても、以前は分析技術が進展しておらず検出できませんでした。そんな中、私たちはいろいろな成分が含まれている日本酒からD型を分離して定量する技術の開発に成功。その技術で分析することで、ヨーグルトや黒酢など、D-アミノ酸を多く含む食品がいろいろあることが分かってきました。

さらに、私たちは日本全国から約150種の日本酒を取り寄せて分析し、先に述べた酒のうまみを強くする特定のD-アミノ酸がどのようなお酒に多く含まれているかを調べました。その探求の中で、伝統的な製法である生酛造りがD-アミノ酸を増やす製法であることを見つけ出し、特に、乳酸菌が大きく寄与していることを明らかにしました。

—150種もの酒の分析は大変な作業だったのでは？

濁った酒や極端にL型が多い酒とか、サンプルごとに異なる前処理をして分析しなければいけないので手間がかかります。



D型及びL型アミノ酸の分析をするために日本全国から取り寄せた日本酒

アミノ酸はL型が19種、D型が19種、L型D型の区別がないものが1種あり、合計39種について1つの検体で計らなければなりません。1つの検体が1回の分析で終わることはなく、論文を執筆した時にも海外の審査員に「こんな作業をよくやった」と驚かれました。それだけ膨大なデータを蓄積できたおかげで、D-アミノ酸と味の関係を統計的に分析することができました。これは私たちの非常に大きな財産となっています。

■伝統の酒造りと先端科学のコラボレーション

—菊正宗酒造とどのような形で共同研究されているのですか？

酒造メーカーはいろいろありますが、地理的に近く打ち合わせ等もしやすいことと、やはり、菊正宗酒造はほとんどすべての日本酒を生酛で造られていることが共同研究のきっかけになっています。にごりんももちろん生酛造りです。生酛造りは酒蔵に生息している天然の乳酸菌を利用する製法で、大変な時間と労力がかかるため、今ではこの造り方をしている酒造メーカーはわずかしかなりません。

最初は生酛造りの各工程のサンプルを頂いて、どの工程でD-アミノ酸が強化されるのかを調べました。面白い結果が出てくると、先方は更に一層興味を持たれ、共同研究がどんどん進んでいきました。菊正宗酒造としては自分たちが守り続けてき



た伝統が、自然の力を利用してうまい酒を造る優れた製法であることの一面を、私たちが科学的に裏付けたことに意義を感じていただいたようです。

今ではD-アミノ酸を利用した造り方の新しいお酒の開発にも共同で取り組んでいます。生酛造りに関わる乳酸菌の中からD-アミノ酸の生産能の高いものを選び、それを使ってD-アミノ酸を強化したうまみの強い日本酒、あるいはアルコールフリーの機能性ドリンクを造ろうとしています。伝統の発酵技術と最先端の分析技術のコラボレーションと言えます。

■D-アミノ酸研究の発展と高まる期待

—D-アミノ酸に対する関心は高まっていますか？

食品をはじめ、幅広い産業からの注目が集まっているのは確かです。既に美肌効果のあるD-アスパラギン酸を加えた美容飲料が販売されています。私自身、鹿児島島の福山黒酢と共同でD-アミノ酸を強化した黒酢の新製品の開発にも取り組んでいます。また、脳に存在するD-セリンは減少すると統合失語症になることが分かっていて、アメリカでは経口投与し、神経疾患の治療薬としての開発が試みられています。D-アミノ酸の研究



が進めば、今後、新しい機能が更に明らかになってくると思います。そうなれば、研究成果を活用したさまざまな商品も生まれてくることになるでしょう

研究では化学、医学、薬学、農学など幅広い分野の研究者が集うD-アミノ酸研究会が約10年前に発足していて、今年9月には本学で開催されます。日本はD-アミノ酸研究では特に進んでいます。それは、本学でも教鞭を執られたことがあり、私の恩師で、日本のD-アミノ酸研究の祖といわれる左右田健次京都大学名誉教授の存在が大きかったと思っています。

—研究だけでなく、商品開発など応用についても以前から興味を持っていたのですか？

私はもともと化学を応用して農業の問題を研究する農芸化学の出身で、基礎研究だけでなく応用研究にも関心を持ってきました。私は、商品開発に走るあまり、基礎をおろそかにするのは戒めなければならないと考えています。乳酸菌のどういう酵素がD-アミノ酸を作るのかといった基礎をしっかりと研究し、学術的な裏付けがあって、応用しなければなりません。私が所属する生体分子工学研究室は、生命・生物工学科の中でもサイエンスとテクノロジーの真ん中にある分野に位置する研究室で、基礎と応用の両方を学ぶ研究室です。今後も蓄積した基礎的な技術や知識を社会に反映し、一般の方にも理解してもらえるような形で研究を展開していければと考えています。

—農芸化学に興味を持ったきっかけは？

小学生のころから、発酵食品が好きで興味を持ちました。それも、食べるだけでなく、発酵という現象に非常に興味があり、特に酵素を研究してきました。酵素は不思議なタンパク質で、例えば、L型のアミノ酸を化学反応でD型に変えるためには、酸やアルカリを使い熱をかける必要があるのですが、酵素を使えば、常温・常圧・中性付近で進行させることができるのです。

—発酵食品好きなら、やはりお酒も好きですか？

好きですけど、あまり飲めないんです。生化学的にアルデヒドデヒドロゲナーゼという酵素がモンゴロイドは弱く、その中でも特に私は弱いようで、これは遺伝的なものかもしれません。

「留学生交流拠点整備事業」に本学の申請事業が採択

関西大学・大阪大学の共同プロジェクト 多文化・多世代共存で北摂地域を元気に

国際化を通じて、北摂地域に新たな活力を――。
 関西大学が大阪大学と共同で取り組む「地域・企業・大学が連携『留学生の第二の故郷』実現への実践的調査研究：Harmonic Osaka・Multicultural Environs (H.O.M.E)コンソーシアムによる『先進のニュータウン、これからの50年』」が2012年9月、文部科学省の留学生交流拠点整備事業に採択された。

この事業は、大阪府北部(北摂)の千里ニュータウン地域(豊中市・吹田市)が誕生50周年を契機に展開する地域活性化事業(「千里ニュータウンまちびらき50年事業」)と歩調を合わせ、大学間連携がある関西大学と大阪大学が主体となって行うもので、これに地域産業・自治体に参加し、共に国際化を図ることで千里エリアの活性化を推進する。

委託期間(3年)終了後も継続的かつ活発な「コミュニケーショ

ン(情報・知見・人材資源の共有)」がなされるような大学・地域・企業の連携によるコンソーシアムの結成と、活動を支える交流拠点の整備を行う。この拠点を通して、地域密着型の国際交流活動を推進し、留学生の生活支援(宿舍支援・就職支援)を行うことで、千里エリアが、外国人留学生らの「第二の故郷」となり、その結果街全体を活性化させることを目指す。本事業が着手するコンソーシアムの仕組みや実践検証の成果は、広く一般に公開し、また他地域の活動団体と積極的に相互学習を行うことで、全国への知見とノウハウの波及を行う予定だ。

具体的には、関西大学内に交流拠点オフィス、吹田市の千里ニュータウンプラザ内に活動拠点を開設し、専門のコーディネーターを常駐させ、大阪府や地元自治体、経済団体などと連携し、留学生に対し、日本人学生や地域住民との交流、地域での国際交流イベントなどの開催、企業でのインターンシップ、留学生雇用枠の拡大を促進する。

H.O.M.E. 街づくり構想

Harmonic Osaka・Multicultural Environs
 北大阪・千里の地域・企業・大学が連携した、「留学生の街」実現への実証研究

留学生が魅力を感じ、ここで住みたい・働きたいと思わせる
 地域ぐるみの交流事業としての「留学生の第二の故郷」プロジェクト

「千里ニュータウンまちびらき50年事業」と歩調を合わせた、
 これからの50年を見通した地域の国際化

H.O.M.E. 千里交流拠点オフィス
 関西大学 国際部 交流室内

H.O.M.E. 活動拠点
 千里ニュータウンプラザ多目的ルーム、
 会議室等

[Harmony]
 ・多文化多世代同居によるニュータウン再生

[Project Advancement]
 ・グローバル人材育成・活用の進歩
 ・若者の交流・定着を促す地域との連携

[Output]
 ・産学連携・地域連携のサイクルの定着を狙った、
 実践的調査研究成果の発信

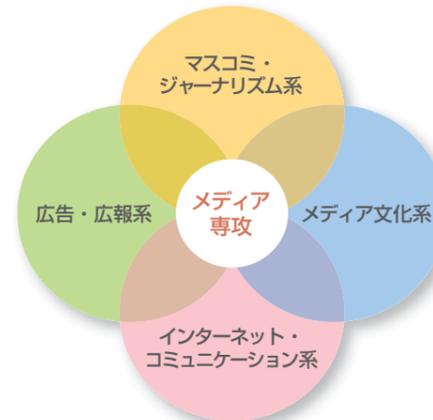
[H24年度11月]
 「千里ニュータウンまちびらき50年事業」国際フォーラム開催

[H25年度・26年度]
 外国人留学生雇用に関心を持つ企業を招へい「キャリア・カフェ」を主催

日本人学生+留学生+地域住民 = H.O.M.E.

社会学部にメディア専攻が誕生

メディア社会で活躍できる人材を育成



メディア専攻の4つのアプローチ

デジタル化の進展、インターネットやモバイルメディアの発達・普及により、メディアを取り巻く状況が日々変化している中、関西大学社会学部メディア専攻が2013年4月からスタートする。メディア専攻は、社会学部のマス・コミュニケーション学専攻を改組。多様なメディアが遍在する「メディア社会」の特質を理解し、行動できる人材を育てることを目標に、より一層の充実をはかる。



メディア社会の特質について、多様な視点から学ぶとともに、各自の関心に応じてひとつの領域について専門的に学ぶ。そのために4つの履修アプローチを設定する。

「マスコミ・ジャーナリズム系」はマスメディアが現代社会に与える影響やその役割について考える。2年間の実践的な特別選抜プログラム、「ジャーナリスト養成プログラム」も受講できる。「メディア文化系」は音楽、観光、スポーツなど、メディアが生み出す豊かな文化の在り方を研究でき、「音楽・メディア研究プログラム」も開講される。「広告・広報系」はマスメディア広告に限らず、さまざまなメディアやコンテンツの中に存在する広告やPRについて、その効果や可能性を検証でき、「広告専門プログラム」も開講される。「インターネット・コミュニケーション系」は、情報社会における新しいコミュニケーションの形について研究を進める。どの履修コースも、プロフェッショナルが指導する豊富な実習科目を取りそろえている。

エッジ効果抑制理論に基づき、世界初の製品化

遮音壁用先端改良型減音装置「デュラカムE-fX」 関西大学と日本板硝子環境アメニティが共同研究・開発



関西大学と日本板硝子環境アメニティ株式会社は、河井康人環境都市工学部教授が解明した独自のエッジ効果抑制理論に基づいて共同研究・開発を行い、遮音壁用先端改良型減音装置「デュラカムE-fX」を世界で初めて製品化し、2012年11月から販売を開始した。

これまで道路や鉄道、建築などの騒音対策として、多数使用されてきた遮音壁。その高さを抑制しながら遮音性を高める

装置として、遮音壁の頭上部に取り付ける先端改良型減音装置が設置されてきた。しかし、装置が大きいため、景観を損ねたり、車がぶつかって壊れてしまうなどの問題を抱えていた。

「デュラカムE-fX」はエッジ効果を抑制する理論に基づき、従来と比べてシンプルな仕様、形状化に成功。高性能な減音性能を確保したうえで、小型・薄型・軽量の三拍子そろった性能改善を実現したため、製品化に踏み切った。

エッジ効果とは、河井教授が音場の理論解析の過程で解明したもので、遮音壁の頭頂部のごく近傍で、空気粒子速度が非常に大きくなる現象のこと。この現象に対して、適切な流れ抵抗を持つ材料を、遮音壁の頭上部(エッジ部)に設置することで、エッジ効果を抑制し、遮音壁の頭上部を回って伝わる音のエネルギーを小さくできる。

通常の3m遮音壁は、遮音壁がない時に比べて15dB程度騒音レベルを下げる事ができる。遮音壁の高さを変えずに、最上部をH=500タイプの「デュラカムE-fX」に付け替えることで、さらに5dB程度下げることができる。これは5mの遮音壁と同等の遮音性能となる。関西大学生まれの世界初の新技術、その普及が期待される。

関西大学協賛の「第2回大阪マラソン」開催

●関大生ボランティアの「全力疾走」 新たにチャリティ募金活動を展開

関西大学が協賛する「第2回大阪マラソン」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が2012年11月25日に開催された。沿道には118万8000人が詰めかけ、3万人あまりのランナーに声援を送った。協賛団体として大会運営に協力する関西大学からは第1回大会に続き、給水ボランティア、語学対応ボランティアとして多数の学生が参加した他、新たにチャリティ募金ボランティア活動を展開し、チャリティマラソンの大会精神のアピールに貢献した。



400人の関大生が3万人のランナーに給水を行う



関大生による給水ボランティア400人は2011年に引き続き、5km地点の給水所を担当した。マラソンランナーにとって、給水はライフライン。5km地点は最初の給水ポイントであるだけに、ランナーが給水カップを確実に受け取れるよう、何度もリハーサルを重ねて万全の態勢で臨んだ。当日は、ボランティアが抜群のチームワークで対応し、給水は順調に行われた。

前回大会に続いて参加した学生も多く、前回の体験が効果的に活かされた。今大会初めてチャレンジランのランナーとして参加した楠見晴重学長が5kmの給水所に立ち寄り、学生たちにねぎらいの声をかけた。学生たちから給水とともに激励を受けた楠見学長はその後力走し、好タイムで完走した。



声をからしてチャリティを呼びかける

選手たちが駆け抜けていく大阪マラソン沿道イベント会場である大阪市中央公会堂前と大阪大林ビル前で、関大生によるチャリティ募金ボランティアが活動した。目的は、大阪マラソンがチャリティで運営されている大会精神を訴えてチャリティを呼びかけることだ。

学内での募集に応じたチャリティ募金ボランティアは総勢24人。おそろいのスタッフウェアに身を包み、募金箱を抱えて声をからしながらチャリティを呼びかけた。



外国語対応、ランナー盛り上げ隊として大会をサポート

前回大会に続き、関大生による語学対応ボランティアが活躍した。今大会には英語と中国語に精通した合計16人の同ボランティアが、総合案内所で外国人ランナーらの問い合わせに応じた。そのほか、中央公会堂前、大阪市西南環境事業センター前で、応援団や学生3団体(チアリーディングサークル「CLAIRS」、ダンスサークル「Belly Divas」、学生チーム「漢舞」)が日ごろの鍛錬の成果を披露し、大会を盛り立てた。ランナー盛り上げ隊をはじめ、沿道ボランティアから熱い声援を受けた関西大学特別参加のランナー18人は本学オリジナルウェアを着用し、2011年同様、全員が完走を飾った。



外国人ランナーの問い合わせに応じる「語学対応ボランティア」



完走を飾った関西大学特別参加のランナー

マラソン学の連載記事が話題に 関西大学教授陣が知見を披露し合う

大阪マラソンの魅力を関西大学の多彩な教育力・研究力でひも解く読売新聞の連載記事が話題を呼んだ。今回の企画は、宮本勝浩、藪田貫、小田伸午、安田雪、弘原海剛の5人の教授が記者のインタビューに答える形式で、それぞれの学問領域からマラソンにちなんだ知見を披露した。

シリーズの初回で紹介した宮本教授の専門は理論経済学で、阪神タイガースの優勝波及効果研究などで知られる。連載企画では第1回大会から計算を続けている大阪マラソンの経済波及効果に言及し、身近な話題で経済と楽しく向き合う知恵を伝授した。記事は読売新聞に5回シリーズで連載されたほか、大阪マラソンファンクラブのウェブサイトにも掲載されている。



RUNNING CAMPで市民選手を指導 NMB48福本愛菜さんも特訓

■メンタルトレーニングの公開講座も実施

大会本番に向けて、誰もが参加できるランニング教室「大阪マラソンRUNNING CAMP」が3回開かれ、市民ランナーらがランニングを改善するための実践的な指導を受けた。講師は五輪マラソン入賞者の中山竹通さん、関西学生陸上競技連盟の水瀬安春副会長と、関西大学陸上競技部の武田夏実監督で、毎回100人が参加した。

最終3回目は本学と共催で、「大会直前、何をやる？」をテーマに、関西大学千里山キャンパスで実施された。当日は2部形式で開催し、前半は「マラソンに使えるメンタルトレーニング講座」として武田監督がメンタルトレーニングの手法などを伝授。後半は、中山さんらによる実技指導を行った。参加者たちは最後のコンディション調整やレースに臨む心構えに関する中山さんや武田監督の説明に、熱心に耳を傾けていた。チャリティランナーとして今大会に参加したNMB48福本愛菜さんも、大会前に武田監督から特訓指導を受け、レースを完走した。



武田夏実監督(左)に指導を受けるNMB48福本愛菜さん

ダイキン工業株式会社と連携協力協定を締結

●「フッ素化学講座」開講で共同研究展開へ

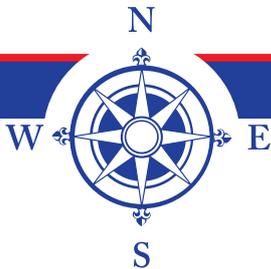
関西大学とダイキン工業株式会社は、教育・研究・人材育成、社会貢献などの分野で積極的に連携することを目的に、「連携協力に関する協定」を締結することで合意に達し、2012年11月28日、関西大学千里山キャンパスで協定書の調印式を行った。具体的には寄附講座「フッ素化学講座」を開講するとともに、これまでの共同研究をさらに充実させるため、研究用装置の寄附提供を得て、共同研究を本格的に進める体制を整える新たな協力関係を確立した。

既に2012年4月から千里山キャンパスにある関西大学ハイテク・リサーチ・コア内に共同研究スペースを設置。石川正司化

学生命工学部教授らと「フッ素系電解液の高電圧正極への適用に関する研究」が進められており、今回の調印の運びとなった。



協定書に調印した青山博一ダイキン工業株式会社化学研究開発センター長(左)と楠見晴重学長



高槻キャンパスに「情報演習棟」が竣工



関西大学高槻キャンパスで建設中だった高槻キャンパスK棟(情報演習棟)が2月26日に竣工した。「情報演習棟」は演習の教育効果を高めるため、専門演習(3年次)から卒業研究(4年次)へと、2年間一貫して演習指導ができる環境を構築するために建設されたもの。専門レベルの少人数教育を専門の情報機器とスペースを用いて実施できることは、学生が2年間連続して利用できる「居場所」を得ることにつながり、キャンパスライフの一層の充実にも貢献しそうだ。建物は地上3階地下1階塔屋1階建てで、延べ床面積4,573.52㎡。演習室57室を中心に、個人研究室3室、多目的室1室、キャリアセンター、保健室、倉庫、展示スペースなどで構成。エスカレーター、エレベーター等が設置され、既存建物とは渡り廊下で接続される。

商学部岸谷ゼミの学生考案の就活アプリが商品化

関西大学商学部岸谷和広准教授ゼミの学生たちが考案したスマートフォンアプリ「マイナビ就活名刺」がこのほど完成した。このアプリは「スケジュール・イノベーション・カレッジ(Sカレ)2011」で総合準優勝した企画「はじめての名刺交換」(岸谷ゼミamitieチーム考案)が商品化されたもの。株式会社マイナビが支援し、就職活動支援サイト「マイナビ」のアプリとして、端末向け配信サイトで無料でダウンロードできる。



スマートフォンアプリ「マイナビ就活名刺」

「就活を楽しくする製品にしたい」という学生ならではの思いが実現。スマホで簡単にオリジナル名刺を作り、その場ですぐに名刺交換ができるのが特色。就活だけではなく、普段のコミュニケーションツールとしても活用しやすい。



◀「はじめての名刺交換」を考案した商学部岸谷ゼミamitieチームの学生

吹田市4大学「大学スイーツ」コンテストで
 文学部2年次生の宇都宮あかりさんが優秀賞を受賞

吹田にぎわい観光協会主催の吹田市4大学「大学スイーツ」コンテストで、文学部2年次生の宇都宮あかりさんが優秀賞を受賞し、



優秀賞を受賞した宇都宮あかりさん(前列右)2012年12月15日、表彰式が行われた。宇都宮さんはスイーツ巡りに取り組む本学のイベントサークル「すうい〜つ(笑)」の会長。今回のコンテストでは大阪ミュージアム構想に選出された「吹田モチーフ」の1つである「三色彩道」をイメージし、三色の葉を再現する寒天、くずもち、羊かんを使用した和菓子を考案した。宇都宮さんは「吹田を知らない人には吹田の素晴らしさ、吹田から離れた人には懐かしみ、吹田に住む人には吹田の愛しさを感じてほしい」と作品に込めた思いを語った。宇都宮さんの作品は吹田市内の和菓子店から「商品化を検討したい」と高く評価された。

フィギュアスケート各大会で
 高橋大輔選手ら本学学生が活躍



今季の活躍が目覚ましい町田樹選手(左)と宮原知子選手

激戦が続くフィギュアスケート各大会で、本学学生の活躍が相次いだ。2012年12月5日からロシア・ソチで開催されたフィギュアスケートグランプリ(GP)ファイナルで、体育会アイススケート部の高橋大輔さん(文学研究科M2)が、圧巻の演技で日本男子勢初の優勝に輝いた。同部の町田樹さん(文4)も6位に入賞。ジュニアGPファイナルの女子シングルで、関西大学中等部の宮原知子さん(3年)が5位に入賞した。GPファイナルに先立つGP中国杯の男子シングルでは、町田さんが初優勝、高橋さんが2位入賞を果たした。全日本ジュニア選手権では中等部の本田太一さん(2年)が6位入賞、宮原さんが2位に10点以上の差をつけて連覇。全日本選手権では男子シングルで高橋さんが2位、同部の織田信成さん(文学研究科M2)が4位、町田さんが9位に入賞。女子シングルに出場した宮原さんが3位、村元小月さん(文4)が9位に入賞した。